

三年前の検査で妻の左胸に乳がんが見つかった。幸い、早期発見のために転移もなく、術後も順調に回復して無事に退院することができた。

退院当日、荷物の整理を終えて会計で支払を行っているとき、入院中にお世話をしてくれた数名の看護師が勤務の合間に見送りにきてくれた。妻はお礼の言葉を口にしながら目に涙をためていた。私は目の前で繰り広げられる慎ましやかな別れの挨拶にようやく肩の荷を下ろしながら、彼女たちに向かって深々と頭を下げた。

妻が乳がんの検査を受けはじめたのは、同級生を同じ病気で亡くしたことがきっかけだった。卒業後も頻繁に連絡を取っていた二人だったが、互いに忙しい時期が重なってしばらく疎遠になっていたあいだに届いた訃報だった。

亡くなった親友が末期の乳がんを患っていたと知ったとき、妻は表情を強張らせたまま言葉が失っていた。乳がんの生存率は早期発見で90パーセント以上まで上げることができるらしい。その未然に防げたかもしれない病気で親友を失った妻の後悔はしばらく尾を引いた。もちろん、それは私にとってもひどく悲痛な出来事だった。家庭を持つ一人の男性として、残された遺族のことを考えると背中が冷たいものを感じた。

「相手のためにも身体にはきちんと気を遣おう」

幸い、加入中の保険会社が助成制度を設けている人間ドックの案内が来ていた。互いを支え合うためには健康の維持は欠かせない。未然に防げる疾患でいたずらに相手を悲しませないためにも、そこでの年に一度の検診が私たちの習慣となった。

受診後すぐに発覚したのは、私の肥満だった。BMI測定の数値は正確に私の怠け心を指摘し、改善を促した。改善に伴う運動や食事制限には苦勞したが、健康維持のために前向きに取り組むことができた。社会人になって以来の不摂生を見直す機会となり、一年後の検診では通常値に近い数値まで下げることができた。

そんな私の苦勞をよそに妻の判定区分はA判定ばかりだった。検査から三週間後、クリニックから届いた互いの結果を見せ合うたび、妻は安堵の表情を見せた。それは、自分の結果だけではなく、相手の結果を見て安心したためだった。きつと私も同じ表情を見せていたに違いない。相手のために自分の健康を維持することは検診を継続する理由になった。年に一度の人間ドックとい

う習慣が、日々の生活に規律と潤いを与えていた。

人間ドックを受けはじめて五年目の冬、併せて受けていた妻の乳がん検診で、要精密検診の結果が届いた。寝耳に水の出来事だった。すぐに病院で組織診検査をすると、担当の医師から悪性の腫瘍の可能性が高いと告げられた。

「ねえ、どうしたらいいと思う？」

電話越しに結果を伝える妻の声は震えていた。私はとっさに、だいたいぶと口にしたが、それは妻と同時に自分を励ますための言葉だった。妻と死別し、この世界に一人で取り残される恐怖。それはいつか背中に感じた冷たさよりも骨身にこたえるものだった。このようなとき、本当に目の前が真っ暗になることを知った。

夫婦で落ち込んだのも束の間、乳がんの発見から治療まではあつという間に事が運んだ。告知を受けた翌週から治療の段取りが説明され、他の臓器への転移がないことを確認したあと、手術による局所治療が決まった。

手術の二日前から入院し、術後、一週間ほどで退院となった。

もちろん、退院まではあつという間だったが、治療に対する不安がなかったわけではない。がん患者とその家族にとって、一日は長く、また、不吉な想像に悩まされる日々を送った。たとえ同じ結果になるとわかっていたとしても、二度と経験したくない十日間に違いなかった。

退院後、病院から自宅まで戻る車内のなか、助手席に座った妻はしばらく考え込んだあと、この数日間の出来事を確かめるように呟いた。

「無事に退院することはできたけど、私って運が良かったのかな」

現在、成人女性の九人に一人が乳がんになると言われているが、そのうちの九割は早期発見で治すことができる。乳がんになったことの不運と、それを早期発見できたことの幸運を妻は図りかねているようだった。

「きつと、準備が良かったんだよ」

私は言葉を選んで返事をした。どのような病気であれ未然に防ぐに越したことはないが、それでも、妻の乳がんのように予防が難しいケースもある。その際、健康診断や人間ドックの定期的な受診を行っていれば早期発見に繋がりが、大事に至るリスクを下げるができる。大切な人のために自分の身体を気遣う手間を惜しまなければ救われる命もあるのだ。

妻はどこか安心したように微笑んだ。これからも、互いの健康の定点観測として、また、病気の早期発見のためにも人間ドックの受診を続けていきたい。